

September 2008

大阪大学図書館報

vol. 42 no. 1 通巻 164号

発行所 大阪大学附属図書館 2008年9月30日発行
〒560-0043 豊中市待兼山町1の4

e-mail: kohowg@library.osaka-u.ac.jp

CONTENTS

【特集1】学生が選んだ本

- 「若者はなぜ「会社選び」に失敗するのか」…P.2
- 「道は開ける」…P.3
- 「キリスト教の伝統」…P.5

【特集2】先生が書いた本…P.6

- 教員著作寄贈図書のご紹介…P.7
- 「わたしのおすすめ本」リレー連載 その4…P.8
- 冬のピッツバーグ大学図書館での研修…P.8
- 附属図書館本館、吹田分館の耐震・改修工事に関するお知らせ…P.11
- 「大阪大学附属図書館の理念と目標」を策定しました…P.12



イチオシ本特集



【特集1】学生が選んだ本

今年も学生選書ツアーを実施しました

附属図書館による学生選書ツアーが2008年6月26日(木)に実施されました。この選書ツアーは学生さんの「こんな本が図書館にあればいいのに!」というご要望にお応えし、利用者ニーズを蔵書に反映させるため、昨年から実施しているものです。選書は紀伊國屋書店梅田本店内で1~2時間行われ、附属図書館の蔵書となる図書を、参加した学生の皆さんに選定していただきました。

文、人、法、経、理、工、基、情の各学部の参加学生11名が選んだ図書から、既に蔵書にあるものや個人購入が適当と思われるもの等を除いた約290冊を購入しました。

この選書ツアーは今後も続けていく予定ですので、次回もぜひご参加ください。

特集1では、今回の選書ツアーで選ばれ、購入した図書のうち数点について、その選定者である学生からのコメントをご紹介します。

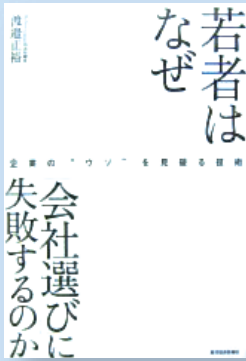


選書ツアーの様子

立ち読みじゃないよ
選書中だからね

「若者はなぜ「会社選び」に失敗するのか」

渡邊正裕著（東洋経済新報社）2007



●選書者のコメント

選書者ご所属・学年：基礎工学研究科 博士前期課程1年

「自分はどういった会社に入りたいのか？」を考えることは「どのような人生を送りたいか」を決めることに等しい。選択肢をどんなにたくさん用意しても最終的には1社に絞らなければならない。そのためには自分なりの明確な優先順位を持っておくことが必要である。すなわち、自分にとって大切なのはカネなのか、スキルアップなのか、休みなのか、職場環境なのか・・・。

本書ではさまざまな企業が、

【仕事】（やりたい仕事ができるか、英語力が生かせるか etc.）

【生活】（残業・休み、社風・社員の人柄 etc.）

【対価】（報酬・福利厚生・評価・雇用）

といった12個の具体的な指標でマッピングされており、客観的に会社の位置づけを分析できる。データの元となるのは著者の「企業ミシュラン」シリーズだ。主な企業についての情報を知りたい方はぜひこのシリーズをご覧ください。

本書を含めこの「企業ミシュラン」シリーズには、著者が20代・30代の現役社員と離職後1年以内の元社員合わせて200人以上に各々2～3時間かけて直接取材をして集めた情報が書かれている。彼が社員への直接取材にこだわるのは、企業のフィルターを通した情報にはウソがあるからである。企業は「うちはサービス残業が常態化しています」「ノー残業デーを設けていますが実際は持ち帰り仕事になるだけです」などと答えられない。投資家や経営側ではなく、働く側に立った情報で無ければ意味が無いのだ。

この情報の信憑性は、著者が企業からの広告収入を全く得ておらず、主な収益は彼が運営する有料サイト「MyNewsJapan (<http://www.mynewsjapan.com/>)」によることからうかがえる。

まず、企業とのしがらみが一切無いため、毎年「就職したい企業ランキング」上位を占める某大手広告代理店や某世界的自動車メーカーの実態なども平気で書けるわけである。大抵の大手出版社はマスコミを使って広告を打つため、マスコミ企業の批判ができないし、多額の広告費を落としてくれる「顧客」の巨大企業の暗部についての記事や書籍などを出せるわけがない。

また、低俗な週刊誌のような根も葉もない暴露話を垂れ流しているだけでは、当然有料会員は離れていき、著者の信頼は失われ活動ができなくなることは明らかである。

以上のような点からこのシリーズは信頼性が高く画期的である。が、何も私はこの本の内容を全て鵜呑みにせよとは言うつもりはない。いくら直接取材して得た情報であっても多少は著者や取材を受けた個人の人々のバイアスがかかっていることも考えられるからだ。100%正しい情報など存在しないし、最後に正しいかどうかを判断するのはあなた自身である。

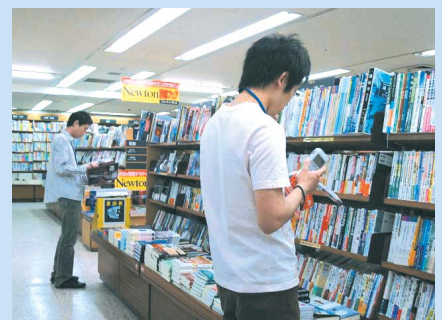
「この会社では本当にやりたい仕事ができるし給料も30代で1000万円はいくから、残業が月150時間を超えても構わない」
「この企業は長期安定志向で骨を埋めるのに適している。有給もそこそこ取れるし、社内の評価やシステムが理不尽なのは仕方が無い」

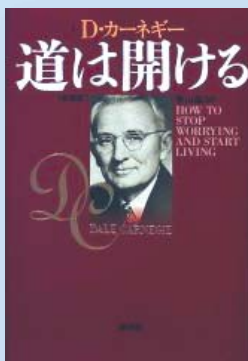
といった判断を下した上で入社する分には何も問題ないのだ。

間違っても、企業側が莫大な資本力を背景に広告会社を使って打ち出してくるウソのイメージ戦略に騙され、情報操作され、評価軸がどんどんブレていき、入社できたのはいいが「こんなはずではなかった」と大きなギャップを感じて辞めなくなる・・・ということにはなりたくない。

皆さんも「就活には成功したが、就職は失敗した」という馬鹿な目には遭いたくないはずである。

本書は、百戦錬磨の企業に対抗するための武器の1つにはなるはずだ。
丸腰で戦場に向かってはいけない。





「道は開ける」 デール カーネギー著（創元社）1999

● 選書者のコメント

選書者ご所属・学年：基礎工学研究科 博士前期課程1年

私はこの本をブックオフで100円で買った。

熊谷正寿というベンチャー企業の社長が書いた本に「D. カーネギーの『人を動かす』と『道は開ける』の2冊は暗記してしまいたいほど素晴らしい内容だ」と絶賛されていたので、「どうせ若い社長が好むようなキラキラした内容なんだろうな」と思って読んでみたが、予想は見事に裏切られた。本書に限って言えば「こうすればあなたは成功者になれる!」といった類のものでなく、あらゆる人間に共通する「悩み」の実態とその克服法が述べられてあったのである。

後で知ったことだが、デール・カーネギーの「道は開ける」は日本国内だけで200万部以上を売り上げており、「人を動かす」に至っては日本国内で430万部、世界で1500万部以上を売り上げ、発売から70年（日本では50年）近く経った現在でも売れ続けるという超ロングセラーになっている（※Wikipedia 参照）。「人を動かす」も今回の選書ツアーの結果、購入して頂くことになったのでぜひご覧頂きたい。（それにしてもこれほどの名著が現在まで阪大の図書館に置いていなかったというのは驚きである。）

著者のカーネギーはこの「悩み」を解消するテキストを執筆するに当たって、孔子からチャーチルに至るまでのあらゆる種類の伝記数百編を読破し、ジャック・デンプシー（『はじめの一步』に登場する技の元祖であるボクサー）、ヘンリー・フォード（フォード・モーター創設者）、エレノア・ルーズベルト（米国第32代大統領フランクリン・ルーズベルト夫人）など各界の著名人を相手にインタビューを重ねた。そして、自身が講師を勤めるYMCAの成人クラスで、生徒達に悩みのための原則を与え、実生活の中で応用してもらい、得られた結果を報告してもらう、という「実験」を行った。

カーネギーはこのような経験を通して、「地球上の誰よりも多く『私はどのようにして悩みを克服したか』という話に耳を傾けてきた」と述べているが、それはこの圧倒的な事例と分析を読めば十分に納得ができる。内容も心理的なものから宗教的なもの、そして「疲労や倦怠」にまで及んでいるという徹底ぶりだから興味深い。

巻では「こうすればハッピーになれる」だの「スピリチュアル」がどうだの「心理セラピー」云々といった内容の本が溢れているが、その類の書物に書かれているような内容は、残念ながら70年前に出された本書にほとんど書かれていると言ってよい。説得力も桁違いである。

ただの名言集なら誰でも書けるが、この本は、心に響く言葉だけでなくそれを裏付ける実話も多数収録されており、それらも実に面白い。年間400冊以上を読破しているという本田直之氏の「レパレッジ・リーディング」にもカーネギーの2冊は「繰り返し読むべき極少数の本」として挙げているのも頷ける。従って、表面的に「いい言葉」を探して「ためになった」で終わるにはあまりにも惜しいということを前置きした上で、私個人が特に感銘を受けた言葉をいくつか紹介させて頂く。

- ★ われわれには一度に一つのことしかできないし、砂時計の砂がくびれた部分を通るように、ゆっくりと、一定の速度で仕事を片付けるしか手はない
- ★ 惨めな気持ちになる秘訣は、自分が幸福であるか否かについて考える暇を持つことだ
- ★ 私たちは180秒前の出来事にさかのぼることも、それに変更を加えることもできなくせに、多くの人はそういう愚かな行為をしているのである
- ★ あなたは両足を10億ドルで手放す気があるだろうか？ あなたの両足を何かと交換したいと思うだろうか？（略）『自分に備わっているものをほとんど顧慮せずに、いつも欠けているものについて考える』傾向こそ、地上最大の悲劇と言ってもよい
- ★ 最も悲惨な人間は自分の肉体と精神を捨てて、別の人間や動物になりたいと願う人である

なるほど



どうして感銘を受けたかと言えば、私こそ、まさに今挙げた「惨めな気持ちになる」秘訣を実践し、「愚かな」行為をし、「悲劇と言ってもよい」傾向を持ち、「悲惨な人間」の考え方をしてきたからである。この本の中で、これらのフレーズと出会うたびに頭を殴られた思いがした。そして、「性格をガラリと変えよう」などと無茶なことは思わないが、少なくとも「悩まない人間になることは可能なのだ」という確信を持たせたことが何よりも収穫であった。もっと以前にこの本と出会っていれば、院試で胃潰瘍になることも無かつたらうに、とも思うが考えるだけ無駄なのでやめておく。

今私はこの書評を締切ギリギリになって書いている。(厳密には0時を過ぎて締切を過ぎているのであるが)明日から、試験とレポート提出期限のラッシュが続く。しかし私は慌てない。悩む必要も無い。なぜなら、私は「一度に一つのことしかできない」し「今日一日の区切りで生きるしかない」ことを理解したからである。

今後、就職の際や社会人になってからも、私は様々な困難や問題に出くわすだろう。そのときには、本書に書かれた克服法を実践していくつもりである。

最後に補足として、この本の個人的な別の味わい方を2つ提案したい。

● 1つは、私の大好きなとある漫画に登場する文句がこの本に載せられていることである。私にとっては新鮮な発見であった。

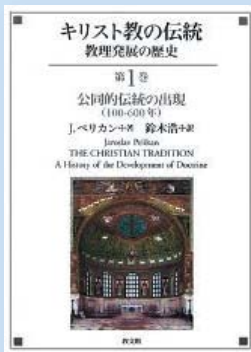
- ・ 刑務所の鉄格子の間から、二人の男が空を見た
一人は泥を眺め、一人は星を眺めた
- ・ 北風がバイキングを作った

これだけで何の漫画かわかった人は、ぜひ本書を手にとりて該当箇所を探して欲しい。

● もう1つは、本書の第19章に「信仰」の必要性について述べられていることである。私がこの本をまだ100%受け入れられない唯一の理由がこれである。私は無神論者で、宗教や祈りと聞くだけですぐ「洗脳」や「現実逃避」「他力本願」を連想してしまう。だから、本書で「多くの著名人が神に祈りを捧げている」「信仰が皆無となることは破滅を意味する」「悩みや不安を感じるなら、神にすがろうではないか」などと書かれていると、どうも違和感を感じてしまうのだ。著者は別にキリスト教に入信しろとは言っていないし、祈りによってもたらされる自然の神秘的な力を「アラーと呼ぼうと、靈魂と呼ぼうと、その定義にこだわる必要はないではないか」と述べているので、今のところあらゆる苦難を何もかも背負い込んで胃潰瘍や神経衰弱に悩まされるぐらいなら「そんなに気にしなくても勝手に何とかできるだろう」と思いなさい、という風に解釈しているのだが、どうだろう？ こればかりは皆さん自身に本書を読み解いて頂くしかない。「こんな話はデタラメだ」と思うか「やはり自分にとって都合の良い神のような存在を持つておくことは必要ではないか」と思うかは皆さん次第である。

さて、祈り云々の話を抜きにしても、「面白くなかったら捨てればいいや」と100円で買ったこの古本は、やはり私にとって名著である。全く本との出会いは偶然の産物である。そして、この本を紹介させて頂く機会を与えて下さった図書館の関係者の方々には心よりお礼を申し上げたい。





「キリスト教の伝統」シリーズ全五巻

J. ペリカン著 鈴木浩訳 (教文館) 2006

●選書者のコメント

選書者ご所属・学年：文学研究科 博士後期課程1年

大学に籍を置く者として、私たちは常日頃から、自分たちの学問の限界という問題を多かれ少なかれ意識しています。とは言っても、喫緊の課題というよりはむしろ、あまり触れられたくない、後ろ暗い話題だというのが正直な気持ちだと思います。例えば、「あなたの研究している学問が正しい理由を教えてください」なんて質問をされても、普通は困ってしまいますよね。

だったら反対に、学問の方法では割り切ることの出来ないものについて考えてみましょう。こちらの問いになら、直観的とはいえ、答えを返すことが出来そうです。人生の岐路で下される倫理的な決断がそうです。さらに人は、覚悟を持って自分の生き方を選び取るために、学問とは別の種類の指針を必要とすることがあります。それが宗教です。宗教は学問ではない、科学ではないと言うのは正しい。しかし、何らかの宗教を信じるか信じないかは、あくまでも個人の生き方の問題で、外部の基準からそれを間違いだと批判することは出来ません。でもだからといって、宗教の領域では何でもアリかという、そういうわけでもないのが難しいところです。やはり、正統な宗教とカルトのあいだには線引きがなされなければならない。でもどうやって？

ずいぶん前置きが長くなりましたが、私が紹介するヤロスラフ・ペリカンの『キリスト教の伝統』シリーズ全五巻は、現在のところ、最高の水準でキリスト教の教理史を論じているシリーズです。だからこそ、上で述べたような問題を考える上で非常に参考になります。というのは、キリスト教の歴史とは、線引きの問題をめぐる手探りの歴史だったからです。キリスト教信仰の内容は、初期教会が誕生した当時には予想もつかなかった時代時代の問題意識に応えるかたちで、その都度更新されて来ました。かといって、それまで信じられてきた教えから逸脱するようでは、そもそも教会という営みが成り立ちません。言ってみれば、キリスト教徒たちは、一方で教理から新しい解釈を引き出しながら、他方でその解釈の一貫性を維持し続けるという離れ業をこなしてきたわけです。それが、シリーズのタイトルに冠されている「伝統」という言葉の意味です。もちろん、そうした試みは必然的に、各時代の政治や、社会制度や、世界観や、知のあり方などといった要素から複雑な影響を受けています。しかしそれは、とりもなおさず学問もこの試みから無関係ではいられなかったことを意味します。宗教と学問という二つの異質の営為は、ごちなく衝突と交錯を繰り返しながらも、互いの可能性を究明しようと努力してきました。宗教は、学問の外部にあるからこそ、学問とは何かという問題を問い直すきっかけを不断に与えてくれる鏡ともなります。それもまたキリスト教の歴史の一側面なのです。より広い意味での知識を培うために、本シリーズは必読であるといっても過言ではありません。



おっ！
おもしろそうじゃん



Scopus および Web of Science 講習会を実施しました

標記データベースの講習会は、2008年6月30日(月)、7月4日(金)および15日(火)に、豊中地区ではサイバーメディアセンター 豊中教育研究棟で、吹田地区では工学研究科 GSE コモン・ウエスト棟で行われました。検索実習も含め、各日同内容の1時間30分の講習会で、のべ83名の参加者がありました。

Scopus は世界各国の自然科学、社会科学分野の文献をキーワードで検索でき、引用文献も参照できます。一方、Web of Science は世界各国の厳選して収録した文献を引用検索するためのデータベースです。以下 URL のリストからぜひご利用ください。

<http://www.library.osaka-u.ac.jp/db/dblist.html>





附属図書館では本館、各分館に教員著作コーナーを設け、本学教員の自著寄贈図書を集めて配架しています。この特集では、その教員著作コーナーの本の内、貸出上位 14 冊についてランキングし、一部（コメント欄に○印がついているもの）について、著者からのコメントをご紹介します。

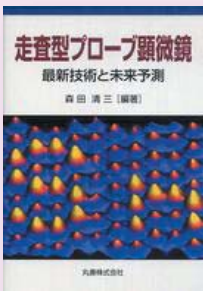
教員著作の貸出ランキング(貸出回数順)

貸出回数	寄贈者氏名(所属)	※敬称略	書名	コメント
11	平田オリザ (CSCD)		「対話のレッスン」	
11	森田清三 (工)		「走査型プローブ顕微鏡：最新技術と未来予測」	○
8	森田清三 (工)		「走査型プローブ顕微鏡：基礎と未来予測」	
8	森田清三 (工)		「はじめてのナノプローブ技術」	
8	片岡勲 (工)		「数値解析入門」	
8	平田オリザ (CSCD)		「演劇入門」	
8	岸本忠三 (名誉教授、生命機能)		「現代免疫物語：花粉症や移植が教える生命の不思議」	
8	藤田一郎 (生命機能)		「「見る」とはどういうことか：脳と心の関係をさぐる」	○
8	福井希一 (工)、栗原佐智子 (工)		「キャンパスに咲く花」	○
6	佐久間修 (高等司法)		「刑法講義」総論	
6	吉岡宗之 (工)		「電気回路入門」	○
6	ヨコタ村上孝之 (言語文化)		「色男の研究」	○
6	熊谷悦生 (基礎工)		「シミュレーションの視点から」	○
6	阿部武司 (経済)		「日本経営史：江戸時代から21世紀へ」	

集計期間：2007年10月1日～2008年6月30日

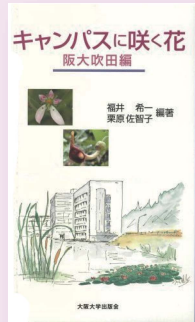
●著者からのコメント

「走査型プローブ顕微鏡：最新技術と未来予測」
森田清三編著 丸善 2005



ナノテクノロジーに必要な不可欠な評価・分析ツールである走査型プローブ顕微鏡 (SPM) の未来予測 (ロードマップ) を紹介した前回の 2000 年の本を 5 年後にバージョンアップした本。日本学術振興会のナノプローブテクノロジー第 167 委員会が中心となり纏めた走査型プローブ顕微鏡 (SPM) のロードマップ。前回の本は基礎的な原理の紹介とロードマップで有ったが、今回は、最新の技術や研究成果の紹介とロードマップを纏めた。

「キャンパスに咲く花：阪大吹田編」
福井希一、栗原佐智子編著 大阪大学出版会 2008



足元にある草や、今咲いているあの樹の花はなんだろう、という疑問に応え、自然科学に尽きない興味を抱いて欲しいという願いを込めて 27 名の阪大教職員、学生、関係者が本文を執筆、写真も挿絵も手がけたフルカラーのハンディ図鑑です。吹田キャンパス内に咲く四季の花 251 種を阪大を背景に、630 点以上の画像で解説したコラムも楽しい内容にしました。基礎セミナー「植物を知り、植物に学ぶ」の成果として企画し、平成 19 年度大阪大学教育研究等重点推進経費の支援により多くの方のご協力の下に完成しました。

「見る」とはどういうことか
：脳と心の関係をさぐる」(DOJIN 選書：7)
藤田一郎著 化学同人 2007



日常の何気ない行為、「見る」こと。単純で簡単なことのようにだが、その時、脳はとてつもなく複雑で多くの仕事をしている。「見る」ことの解明を通して、「脳から心が生まれる」という問題について考える。だれにでも理解できるように書いてあるが、そのめざすところは、脳科学の入門書ではなく、脳研究の最前線へのいざないである。

「電子回路入門」(シリーズ「ゼロ」からスタート)
吉岡宗之著 昭晃堂 2002



初めて電子回路を学ぶ諸君の入門書である。この一冊に電気回路の復習と、ディジタル回路とアナログ回路の基礎を盛り込んだ。

「色男の研究」(角川選書 ; 406)
 ヨコタ村上孝之著 角川学芸出版 2007



古今東西の「色男」のありようを、主に文学作品を例にとりながら描出し、そのうえで、とくに日本の江戸時代の色男が、「恋愛」の発生とともに滅びたさまを描き、今日の日本人の恋愛意識のありようを批判的に検討したもの。

「シミュレーションの視点から」
 (Rで学ぶデータマイニング ; 2)
 熊谷悦生, 舟尾暢男著 九天社 2007



統計処理言語 R を使ったデータマイニングの実証として、選挙データ、ニューラルネットワーク、株式売買に関して解析やシミュレーションを行なった。

・・・ 教員著作寄贈図書のご紹介 2008. Feb. ~ Jun. ...

寄贈者氏名(所属)	※敬称略	書名
作田正義(名誉教授)		「口腔癌の早期診断アトラス」
伏見康治(名誉教授)		「光る原子、波うつ電子」
天野文雄(文)		「一色の翁舞 : 国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」
田野村忠温(文)、石井正彦(文)		「コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発1、2」
桃木至朗(文)		「海域アジア史研究入門」
飯倉洋一(文)		「秋成文学の生成」
西村成雄(人科)		「現代中国の社会変容と国際関係」他1冊
芝山豊(外)		「南北モンゴルカトリック教会の研究」
田中仁(法)		「原典で読む20世紀中国政治史」他1冊
山下真弘(法)		「やさしい手形小切手法 改訂版」
友部謙一(経)		「生命というリスク : 20世紀社会の再生産戦略」
佐藤尚弘(理)		「Chemistry, physics, and biology in macromolecular science」他1冊
恒藤暁(医)、岡本禎晃(薬)		「緩和ケアエッセンシャルドラッグ」
山本容正(医)		「医療マネジメント : 医療の質向上のための医療経営学」
高田健治(歯)		「プロフィットの現代歯科矯正学 新版」
上崎善規(歯)		「分子を標的とする薬理学 : くすりの効き方を科学する 第2版」他1冊
笠井秀明(工)		「固体高分子形燃料電池要素材料・水素貯蔵材料の知的設計」他1冊
小浦久子(工)		「失われた風景を求めて : 災害と復興、そして景観(阪大リーブル ; 6)」
新田保次(工)		「日本の交通バリアフリー : 理解から実践へ」
福井希一(工)、栗原佐智子(工)		「キャンパスに咲く花」
國安均(工)		「化学英語101 : リスニングとスピーキングで効率的に学ぶ」
木戸衛一(国際公共)		「平和の探求 : 暴力のない世界をめざして : 大阪大学国際教養科目「平和の探求」」
竹内俊隆(国際公共)		「ガイドブック国際関係論」
谷口勢津夫(高等司法)		「租税法演習ノート : 租税法を楽しむ21問 第2版」
野島博(微研)		「生命科学の基礎 : 生命の不思議を探る」他1冊
常木淳(社研)		「法理学と経済学 : 規範的「法と経済学」の再定位」
大森裕(先端)		「有機薄膜形成とデバイス応用展開」
奥西峻介(日日教育セ)		「説話・伝承の脱領域 : 説話・伝承学会創立二十五周年記念論集」
竹蓋順子(サイバー)		「話すための英単語 : やり直しドリル:知っている単語を使えるようにする」

詳細は教員著作コーナーのウェブページ (<http://www.library.osaka-u.ac.jp/kyoin/kyoin-kizo.htm>) へ

わたしのおすすめ本

リレー連載 その4



『居酒屋』（「新潮世界文学；21」に収録）

エミール・ゾラ著 古賀照一 訳（新潮社）1970

山森裕毅

豊中本館、各分館に所蔵。

居酒屋なんていえば、今の日本ではサラリーマンと大学生の憂さ晴らしの場所ではない。のどかな光景である。それに反して、19世紀のパリでは、居酒屋には下層階級の肉体労働者や無職者たちが、金もないのに飲んでもらったり、女を口説いたり、破滅に向かうためにやってくる。悪態をつき、罵（ののし）り合い、乱闘を繰り返す。いつものことでもある。アルコール漬けになった人間が何をやらすか、どこまで墮ちるのか、実験を観察しているかのように描かれていく。

主人公はジェルヴェーズという美しき女性。しかし、呪われているかのように不幸が続きまとう。父親には暴力を振るわれ、恋人には捨てられ、旦那は無職で酒に溺れ、娘は高級娼婦になる。周りの人間も、落ちぶれていく人間に悪い評判を流し続ける。幸福な時期もある。しかし、それはもちろん悲惨さを際立たせるためにある。はじめた洗濯屋が大繁盛。ところが、そこに昔の恋人が戻ってきて寄生虫のように財産を食い散らかし始める。美しかった容姿もストレスで太ったかと思うと、店がつぶれ、そのうち食うものにも困り始め、物置のような部屋で暮らすはめになる。主人公もある一線を越えなければまだ大丈夫、まだやり直せると考えるが、それがどの線かはわかっていない。やがて主人公も酒に手を出してしまう。それがとどめの一撃になる。

主人公の男運が悪いといった次元の話を超えている。主人公も周りの人間もとにかくろくでもないことしか言わないし、考えない。酒が入ればなおさらである。この街の全員の考え方がいびつに感じられる。ところが不思議なことにどいつもこいつも健康でたくましい。なんにせよ生きている。どついたり罵ったり、街を徘徊したり、生きる力が無駄に漲（みなぎ）っている。それも酒のおかげである。

そんな元気は私にはない。たかだかサラリーマンと大学生のたまり場ではない日本の居酒屋に落伍者たちなどいるのだろうか。酒・・・おいしいけど、しかし、酒の本当の味は行くところまで行かないとわからないのかもしれない。破滅に向かってしまうくらいの活力を生み出す酒はどんな味なのだろうか。

破滅願望のある方、とどめの一撃の味を妄想でも味わいたい方に読んでもらいたい。

（やまもり・ゆうき 人間科学研究科博士後期課程3年、附属図書館）

冬のピッツバーグ大学図書館での研修

久保山 健



1. はじめに

2007年12月から、2008年3月にかけて、客員図書館員（Visiting Librarian）として、アメリカ東部のピッツバーグ大学図書館に研修のため滞在する機会をいただきました。ここでは、その概要や、「次世代 OPAC」を中心に、いくつかのトピックをご紹介します。

なお、この研修は、電子ジャーナル等の提供元である Elsevier 社の図書館員国際研修プログラムの適用を受ける形で実施されました。

East Asian Library の同僚達
（筆者は後列中央）

2. 研修の日程・目的等

日程は、日本を2007年12月7日に出発し、2008年3月6日に帰国するものでした。準備等の期間もありましたので、実質的に約2ヶ月半の期間でした。

目的については、図書館でのシステム運用管理のことに加え、図書館サービスの展開についても、調査することにしました。また、北米の他大学の図書館を比較するために、日程の後半に1週間の出張旅行を組み込むことにしました。

3. ピッツバーグ大学と図書館の概要

ピッツバーグ大学は、本学同様、医学部、及び病院も有する総合大学です。

規模を本学と比較すると、ピッツバーグ大学とその図書館は、やや大きめの大学であり、図書館です。学生数では、本学の約25,000人に対して、約34,000人、図書館の蔵書数では、本学の約390万冊に対して、約530万冊です。一方、図書館が提供しているオンライン・データベースは、本学の約50に対して、300以上も提供されています。

4. オフィス

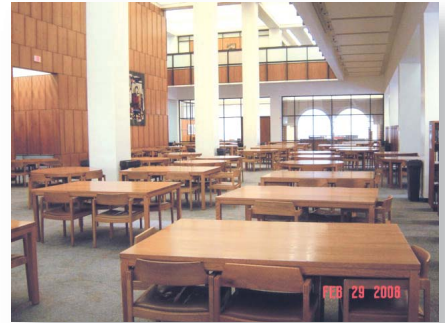
私のオフィスは、中央館であるヒルマン・ライブラリー (Hilman Library) の2階全体を占める東アジア図書館 (East Asian Library) の中に用意していただきました。

これは、ピッツバーグ大学図書館がこれまで中国の大学図書館との交流を続けており、年に複数の図書館員を中国から受け入れていることが背景にあったものと思われます。なお、私はピッツバーグ大学図書館が受け入れた最初の日本人図書館員でした。

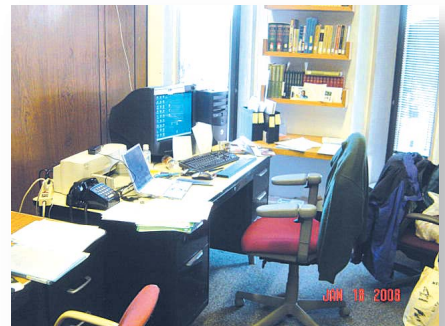
オフィスは、個室を与えられましたが、図書館の他の部署では、上役の方を除いて、キュービクルと呼ばれる、間仕切りで仕切られたスペースで仕事をされているところが多かったです。広さも、机とプラスアルファのところから、システム部門のように（コンピュータがたくさん並んでいるからという理由もあるのでしょうか）一人で6-8畳間くらいのスペースを使っているところもあり、興味深かったです。

オフィスのパソコンは、図書館のシステム部門で集中管理されており、ソフトのアップデートも一括して行われていました。また、ソフトを追加でインストールするのは、所定の様式に上司のサインをもらって申請する必要があります。集中管理型のパソコンは、日本の職場でも広がってきていますが、アメリカの大学図書館では比較的一般的な様子でした。

一方、比較的短期間ということもあって、大部分の仕事は、自分のノートパソコンでしていました。それを館内の無線LANにつなぎましたが、電波状況によっては、外の公園の無線LANも使っていました。但し、印刷する時はオフィスのパソコンにファイルを移動してから、印刷していました。



ヒルマン・ライブラリー閲覧室



借用したオフィス



ヒルマン・ライブラリー



ピッツバーグ大学のシンボリック建物

5. 次世代 OPAC (オンライン蔵書目録)

いつの時点が「次世代」かという、素朴な疑問もあるかと思いますが、北米では“Next generation OPAC”といった呼び方で定着していますので、“次世代 OPAC”という名前でご紹介します。

次世代 OPAC は、アメリカ、カナダでは、一つのトレンドのようになっており、拝見したいいくつかの大学図書館の状況から考えると、2009 年前半辺りには、主要な大学図書館では、これがリリースされていると思われます。

次世代 OPAC の特長を簡単に紹介すると、以下のようなものがあげられます。

- 直感的に誰でも使いやすいことを意識した設計
- Google や Amazon のようなシンプルな検索ボックス
- 検索結果に対する絞り込みのナビゲート機能
- 表紙などのコンテンツ関連情報の表示
- その他、グラフィカルな外見

逆に、従来型の OPAC は、このようなものだと言えるかと思います。

- 検索語の形式等、知識と技術がないと使いこなすににくい
- 検索ボックスはシンプルなこともあるけど、絞り込みはやや面倒
- ほとんど文字のインターフェース

但し、こういうものが次世代 OPAC という明確な定義は存在しないようですし、従来型 OPAC にも次世代 OPAC 的な機能が盛り込まれているものもあります。

私自身、従来型の OPAC に慣れていましたので、最初は、次世代 OPAC に違和感もありましたが、それらの中に、我々の OPAC を改善するヒントはたくさんあると思うようになりました。また、最近の学生は、Google 等によって、「検索」ということ自体に慣れているでしょうし、検索スキルを利用者に求めるより、逆に初めてでも、概ね使えるような仕組みやインターフェースも必要だと考えるようになりました。もちろん、使うための一定のスキルは必要だという側面も認識すべきです。

日本でもプロトタイプを立ち上げるような動きはありますが、文字やレコードフォーマットの課題もありますので、実際にリリースされるのは、2010 年頃、つまりは 2 年近くかかるように見受けられます。本学の場合、システム更新のタイミングから、2012 年前半になる可能性が高いですが、現時点ではどのようなものにするのか検討が始まったばかりです。



広い意味でマーケティングか、町を頻繁に走る大学のシャトル (2枚の写真を合成)

6. 授業の聴講

ピッツバーグ大学の図書館員の方に提案いただいたこともあり、大学院の図書館情報学専攻の「図書館のマーケティングと PR」を 6 回ほど聴講させていただいた。ほんのわずかでしたし、予習や復習に時間を割くこともできませんでしたが、授業の様子や、授業支援システム (Course Web) の活用のされ方などを見ることができたのもよかったです。

「色」や「ロゴ」という点で、図書館や大学の活動を見ると、決まった色やロゴを配布物や出版物に入れ続けるのは、一定の効果があるのだと感じました。

7. 出張

2 月上旬の 1 週間を使って、3 つの大学図書館を訪問しました。1 つ目は、ハーバード大学、2 つ目は、クイーンズ大学 (カナダ)、そして 3 つ目は、グエルフ (Guelph) 大学 (カナダ) です。

結果的には予想以上に有意義なものとなりました。それは、ピッツバーグ大学で見たものが特別なことなのか、北米では比較的一般的なものなのか、考える材料を得たからです。

次世代 OPAC もそうですし、充実した機能を持った身分証・学生証も同様です。また、日本と単純に比較はできませんが、図書館内のカフェテリアも、あるのが普通という状況だと認識できました。

また、カナダの 2 つの図書館は、本学図書館でも計画中の“ラーニング・コモンズ”について、熱心に取り組みされており、参考になりました。

ピッツバーグからの飛行機がフライトクルーの関係で欠航したり、カナダではちょうど大雪が降ったりと、少々ハードなスケジュールでしたが、充実した出張でした。

8. アパート

住んでいた場所についても、簡単にご紹介します。

私の場合、窓口になっていただいたピッツバーグ大学の日本人図書館員が住居を探して下さいました。ただ、賃貸は通常 1 年契約ですので、3 ヶ月といった短い期間で、家具等もついているマンスリーマンション的なものを見つけるのに、ご面倒をかけてしまいました。幸い、通勤や生活に便利で、治安もいいとされているエリアの物件を見つけていただけました。古い一戸建てを改装して、5 つのユニットに分けているところでした。私の部屋は、広めのワンルームで、キッチン、調理器具、TV、ラジオ、シャワー、トイレ、ソファベッド、電話等の揃っている部屋でした。洗濯機も共同のものを無料で使えました。但し、インターネットの利用は別に契約が必要でした。



グエルフ大学



アパート

9. おわりに

今回、貴重な機会をいただき、いろいろな知見や、人的な交流も得ることができました。これが終わりではなく、これをきっかけに、今後の図書館の活動の発展、ひいては本学の研究や学習を発展させることができるよう努力したいと考えています。

最後に、今回の研修に協力いただいた附属図書館、情報推進部の方々、受け入れていただいたピッツバーグ大学の関係者、そして、研修プログラムを提供いただいたエルゼビア社に、深く感謝申し上げます。

(参考 URL)

ブログ的レポート http://dwsv.library.osaka-u.ac.jp/pitt_report/pitt_report.html

(くぼやま・たけし 情報推進部 情報基盤課 図書館システム担当)

附属図書館本館、吹田分館の耐震・改修工事に関するお知らせ



今年度、附属図書館本館（豊中）では B 棟および書庫棟の、吹田分館では旧館の耐震・改修工事が行われることとなりました。この工事は主に耐震性能の強化を行い、施設の安全性確保を目的とするものですが、同時に図書館機能の改善を目指し『ラーニング・commons』の整備等も計画しております。

利用者の皆さまには長期間に渡りご不便をおかけいたしますが、安心してご利用いただける快適な図書館とするため、ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

< 工事の概要 >

	本館	吹田分館
工事期間（予定）	平成20年9月～平成21年3月	平成20年9月～平成21年3月
全面休館期間（予定）	なし	平成20年8月、平成21年4月
リニューアルオープン（予定）	平成21年6月	平成21年5月
図書館サービスの変更、臨時休館日についてのお知らせ方法	附属図書館Webサイト上 (http://www.library.osaka-u.ac.jp/) や館内掲示	吹田分館Webサイト上 (http://suita.library.osaka-u.ac.jp/) や館内掲示
設備の改善・更新（予定）	パソコンを用いた学習、グループ・ワークができる『ラーニング・commons』の整備など	パソコンを用いた学習、グループ・ワークができる『ラーニング・commons』の整備、グループ学習室の増設、視聴覚ホールの拡張など
その他	工事期間中は、工事範囲以外については入館可能とし、できる限り現状のサービス水準を維持する予定です。また、通常どおりの開館日程です。	工事期間中は新館のみで開館し、通常どおりの開館日程です。また、平成20年8月～平成21年4月は、視聴覚ホール、グループ閲覧室2 がご利用いただけなくなります。



平成 20 年 2 月 13 日図書館委員会承認

平成 20 年 4 月 16 日部局長会議報告

大阪大学附属図書館の理念と目標

理 念

大阪大学は、その理念・目標に基づき、世界最先端の研究および教育の実現に不可欠な全学的組織として大阪大学附属図書館（以下、「図書館」とする）を設置し、学術情報基盤を完備した知の拠点の構築をめざす。

この任務の遂行のために図書館は、最先端の学術情報、利用者支援サービス、および豊かな学習・教育・研究環境を、学内者はいうまでもなく地域・社会の利用者に広く提供し、学内各組織と協力し、学外の学術機関とも積極的に交流して、学術活動の進歩に奉仕する。

目 標

- 1 図書館は、電子情報も含めて、人類の知的遺産としての資料を適切に選定・収集・組織化・保存し、それへの最良のアクセスを提供する。
- 2 図書館は、豊富な資料および関連情報の提供、および利用者支援システムの整備を通じて教育・研究活動を支援する。
- 3 図書館は、資料および関連情報のほか情報リテラシー教育の提供によって学生の主体的な学習、および教養の習得を支援する。
- 4 図書館は、学内各組織と連携協力するとともに、国内外の図書館および関連機関との相互協力・交流を推進し、学術情報流通の拠点として機能することをめざす。
- 5 図書館は、施設・資料の公開のみならず講演・展示などの催しを通じて地域・社会に貢献する。
- 6 図書館は、以上の目標を達成する基礎として、利用者のニーズを的確に把握し、それに応え、さらに図書館職員の専門職員としての知識・技能・意識の向上を図る。